



バーチャルジャーナルの編集者になろう

植田 憲一

Every Researcher Should Develop Every Virtual Journal in His Field

Ken-ichi UEDA

一体何から書こうかと迷いました。それほど、いいたいこと、伝えたいことはいっぱいあります。レーザー学会なのだから、現在、日本で進行しつつある日本オリジナルの新しいレーザー研究、例えば、ファイバーディスクレーザーやセラミックレーザー、それらを生み出すに至った10年間の研究、それはものを作るというとは違って、コンセプトそのものを生み出す活動だったから、レーザーコンパスにふさわしいかと思いました。しかし、過去4年間、個人としてもっとも精力をつぎ込んだ活動は電子化出版、オンラインデータベース、さらにその発展としてのバーチャルジャーナルなので、レーザー学会の皆さんに、バーチャルジャーナルの活動に参加されることを呼びかけたいと思うようになりました。

私は1998年から日本の英文ジャーナルの電子化出版、オンラインジャーナルの開発に従事しており、2000年からはIPAP(物理系学術誌刊行協会)の運営担当をしています。この間、両学会が出版するJournal of Applied Physics, Journal of Physical Society of Japan, Progress of Theoretical Physics, Optical Reviewなどの電子化出版は、電子的編集管理システムを含めて、国際水準のものに整備され、実運用を始めるまでになりました。電子化出版の国家プロジェクトにも参加しました。その過程で、いやになるほど感じたことがあります。日本ではこのようなシステムの開発が、研究者と別のところで進んでいて、いわば箱物ようです。研究者達はこれらの活動は研究のらち外にあるような態度で、自らは研究に専念すればよいと思っています。しかし、これは間違いです。研究者が自分たちに使いやすいジャーナル、データベースを、自分たちのアイデアで作り出さなくてはおかしいのです。独創性は研究の中だけではなく、その出版、利用法の全局面で発揮されるべきです。そこで努力しないなら、研究者自らが自分たちの活動は社会的に大して意味がないのだという自己評価をしている事になります。大事なことは自分でやるべきです。

研究をしていて新しい発見をしたり、新しい考えに到達したとき、皆さんは土の中に埋もれていた宝石を発見したような気になりませんか。その価値を知っているのは、発見者である自分しかいないということは、発見者がきちんと義務を果たさなければ、その宝石はまたただの石ころに戻ってしまいます。宝石を磨いて、その価値に値する正当な取り扱いがされるまで、世話をする必要があります。出版やデータベース化に不熱心な研究者は、いわば生みっぱなしの母親のようなものです。IPAPでは青山学院の秋本先生が発見されたMgF₂高温超伝導のバーチャルジャーナルを始めました。日本から始まった仕事は日本が育成する責任があるからです。レーザーの世界でも、同様のことを始めましょう。例えば、セラミックレーザーの研究ではレーザー発振を報告した論文はすべて日本の成果です。この分野のバーチャルジャーナルを日本が作らなくてどうするか、という事です。同じように、皆さんの周辺で、たくさんの独創的な研究があるはずで、それらを欧米の価値判断と序列に任せるのではなく、我々の尺度で並べ直すことも学問として重要なことです。そして、レーザー全体に関するバーチャルジャーナルは、いろいろな分野のバーチャルジャーナルが積み上がるような形で、下から構築されるべきものです。現代ではそのためのツールが広く普及していて、自分がやる気になりさえすれば、誰でも編集長になることが可能です。誰でも使っているワードだけでもできてしまいます。そして、自分が編集長になってみれば、その分野を俯瞰的に見ることができて、自らの研究の位置づけも明らかとなります。それによって、より一層、独創的な研究を生み出すことができます。バーチャルジャーナルを自分で作ってみることをお勧めします。

* 電通大レーザー新世代研究センター (〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1)

* Institute for Laser Science, Univ. of Electro-Communications, 1-5-1 Chofugaoka, Chofu, Tokyo 182-8585